

フラメンコの樹

第9回

鈴木 真澄 (バイラオーラ)

Masumi Suzuki / 1958年中野生まれ。6歳でバレエ。12歳で新体操。15歳フラメンコ。18歳渡西。21歳結婚。22歳雄輔出産。23歳麻衣出産。25歳教室開設。26歳離婚。34歳雄輔渡西。36歳麻衣渡西。42歳会社設立。50歳初孫。60歳フラメンコ。俳句入門。



©GRASPANY

「フラメンコの踊り手です」

って言うけれど、「私はプロです」ってなかなか言えません。

为什么呢……

自信がないから？

プロなのに？なんて言われるのこわいから……？

最初は10代で習い事から始めたフラメンコですが、後に生きていくために教え始め、ライブにお誘いがあれば踊るようにになりました。

マジョルカ島に住む先生は「私たちの道に終わりはないね」と言っていました。が、練習生でも芸事をやればキリがなく高みを

目指します。じゃ、どこがアマチュアとプロの境目なんですか？ 出演料をいただくのがプロでいただかないのがアマチュア？

仕事振りについて考えてみます。

デザイナーだった母は東中野と落合の間、山手通り沿いに「ジューン洋装店」を構え、ウィンドーには洒落た柄の布を纏ったマネキンが立ち、ゴージャスな応接セットのテーブルにはフランスのファッション雑誌。仮縫い用の鏡とそれを囲むステキなカーテン。

お客様がいらつしゃると、生地見本の棚からお似合いになりそうな生地を何点か広げ、サササッとデザイン画を描いてご希望を聞く。

お得意さんは「これからの季節に着る洋服を作ってください」

この一言で、服は元よりそれに合った帽

子、バッグ、靴までも任せてくれていたようです。トータルでお洒落を楽しんでいた。たく事を目指していました。

分野は変わって医学界。

肩が痛くなり病院に行ったら

「しばらく安静にしてください。フラメンコなんて持ったの他です」とおっしゃるお医者様。悶々としながら安静にしているけど、他のあちこちも凝ったり痛んだりしてくる。

別なお医者様は、そんなに楽しいならば良い事だからやめないで、動かしながら直しましょう！

その痛みだけを取るのではなく、その人の人生全体を考えてくださる。そんな親身になってくださるお医者様がいなあ。

小さな頃、かかりつけの近所の黒澤先生はお顔を見ただけでお腹痛かったの治ってしまいました。大好きだったから元気な時も遊びに行つて、お薬包むの手伝ったりして……(笑)

アマチュアでも舞台上立つ時は準備や気構えがともしっかりしている人もいれば、プロでも自分の踊り以外は眼中にない人もいます。

踊りですべてを表すのがプロ？
踊りには人生すべてが出ちゃうんだけどなあ……

プロ意識、プロ根性……
周りの人達から「さすがプロだね！」と言われるようになってほしいのです。